

## 週報

## こひつじ

第40巻 29号  
 大津キリスト教会  
 菊池郡大津町室 119  
 TEL 096-293-4470  
 FAX 096-293-4961  
 牧師 米村 英二

## 祝祭の人生を生きる

## その二 主が成し遂げてくださったから

ではなぜ神は、これほどまでに、私たちが祝い、喜び楽しむことを願われるのだろうか。

それは神がすべてを成し遂げ、完成してくださったからである。

二〇一六年の熊本地震で崩壊した南阿蘇鉄道が全線復旧し、一番列車が肥後大津駅に到着すること

になった。妻がそれを見にゆくと、駅では歓迎式典が行なわれ、多くの人が祝いの旗を振って出迎えていたという。

このように人が祝うのは、何か

が成し遂げられたときである。韓国では子どもの満一歳の誕生日が盛大に祝われる。

それには理由がある。昔は、日本でもそうだったが、一歳前に亡くなる子どもが多かった。そこで

ぶじ守られ、一歳を迎えたら、それは大きな業績と考えられたのである。いちばん死亡率の高いその

時期をその子は乗り越えたのだから。

日本では子どもが高校や大学の受験に合格したときに祝う。目的

が達成されたからである。しかし祝うのは、あくまで合格

の通知が来てからで、それまでは受験者はみな不安であり、心配だ。

このように祝うことと心配することとは両立しない。どちらから

か

ある。

そこで私は思う。人生には心配する人生と喜び祝う人生の二種類があるのではないかと。

「恐れてはなりません」

「心配したりしてはいけません」

と繰り返し言われたイエスは、むしろ後者を望まれる。

私たちに関するすべてをイエスがすでに成し遂げてくださったからである。

イエスは、いよいよ十字架を前にして、こう祈られた。

「あなたがわたしに行なわせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなただの

栄光を現わしました」(ヨハネ 一七の四)

また十字架上で酸いぶどう酒を受けられると言われた。

「完了した」

つまりイエスがその人生を終えられるときに大声で叫ばれたのは

「完了した」という勝利の宣言だったのだ。

だから祝宴をあげる。そして喜ぶ楽しむのである。

聖書は祝宴の場面を何度か記し

ている。

たとえばイエスが、復活後、ご自分を現わされたときのことだが、イエスは、漁をしている弟子たちに言われた。

「舟の右側に網をおろしなさい」

すると、網を引き上げることができないほどに多くの魚がとれ、

弟子たちは驚く。イエスは、岸辺で炭をおこし、

「さあ魚を持って来なさい。そして朝の食事をしなさい」

そう言って、弟子たちと祝宴の時をもたれたのである。

その祝宴の主催者はイエスである。必要なすべてを整えられたのもイエスである。

われわれが祝うのは、主がすべてをしてくださったからであって、われわれが何かをしたからではない。

放蕩息子が帰ってきたときも祝宴が開かれた。そのときの主催者は父親であり、父親がその祝宴の

すべてを整え、息子をゆるし、いやし、歓迎し、彼の存在を祝って

やったのである。

クリスマス生活とは、このよ

うに、本質的には、祝宴の生活だ。感動するのです。聖書は、この夫  
 繰り返し言うが、それは、イエ 婦について「この女は聡明で美人  
 スが私たちに関するすべてを成し であつたが、夫は頑迷で行状が悪  
 遂げてくださったからである。 かつた」と言っています。  
 イエスが完了したと言われたの ども、笑えません。振り返ると、  
 なら、完了したのである。だから 私も妻にはずいぶん助けられてき  
 祝うのである。(続) ました。妻は聡明で、ぼくはやは  
 り頑迷だったのだと思います。(米 村)

今日の礼拝

\*\*\*\*\*  
 ○第一礼拝は午前10時から、  
 第二礼拝は午前11時から、  
 ○教会学校は午前10時から。  
 ○説教は米村牧師。

先週の出席

\*\*\*\*\*  
 ○第一礼拝が四八名、第二が四  
 七名、合計九五名(男三三、女六  
 二)、それに子どもが八名。合計  
 一〇三名でした。

先週の礼拝

\*\*\*\*\*  
 ○司会は林田はるかさん、奏楽  
 は吉岡裕美さん。

来会者紹介

\*\*\*\*\*  
 ○野口裕治・訓子夫妻の長女喜  
 美(ゆきみ)さんの家族(東京在  
 住)を紹介しました。

\*\*\*\*\*  
 ○そのほか旅行中の丸野さん家  
 族(愛知県在住)が礼拝につど  
 てくださいました。

散歩と雲

\*\*\*\*\*  
 ダビデは彼女のとりなしの言葉に  
 \*\*\*\*\*

朝の散歩はまだ続けています。  
 雨の日は、近くの公園のゴムチツ  
 プ舗装されたジョギングコースを  
 歩きます。水はけがよく、歩きや  
 すいのです。  
 この数日は雨も降らないような  
 ので、朝の五時前に、いつもの農  
 道に向かいました。俵山が正面に  
 見え、広い空とダイナミックな雲  
 の動きが、やはり壮大です。  
 早朝に、空を仰ぐだけでも心が  
 高められます。  
 詩人尾崎喜八は空について多く  
 の詩を書きましたが、これはその  
 一節。

ごらんなさい、  
 頭の上を、あの高いところを。  
 私たちの魂の  
 欲しいとあこがれているものを  
 残らず与へてくれるような  
 七月の夕暮の  
 美しい空、美しい雲ですね。

尾崎は空や雲について、ラスキ  
 ンから、その思想を学んだと言っ  
 ていますが、そのラスキンは、こ  
 んなことを「大空」と題する論文  
 の中に書いています。  
 「空は、自然がその仕事のうちで、  
 他の何よりも、人をよるこぼそう  
 と力をつくしている部分である。  
 自然のなかの他の作物は実質的  
 な益をわれわれに与えているが、  
 空は、そんなものは何もあたえず、  
 ただ人に語り、教えることを一つ  
 の目的としている。  
 地上の生き物が感じないもの、  
 光や雨、露以上のものを、頭上の  
 青空から得よ、というのがわれわ  
 れ人間に対する神の意志なのだ、  
 われわれは空を眺めても、ただ無  
 意味で単調な偶然の連続だ、とい  
 う程度にしか思っていない。  
 空や雲は、天使が日々われわれ  
 のために造り、しかも永遠に続き、  
 二度と繰り返されない光景だ。  
 それはわれわれに信仰の道を教  
 え、美しさの奥義を伝えてくれる。  
 高い理想を抱いた画家や詩人が最  
 も研究すべき光景であるべきだ」  
 尾崎やラスキンにならって、も

う少し山や空、雲を眺めるなら、  
 それによって私たちが得る心の富  
 は想像を超えたものとなるでしょ  
 う。